

平成25年1月5日発行(毎月5日1日発行)
第53巻1月号(通巻642号)

風土



1

返り花
神蔵器

たましひのあそびせむとや菊を焚く

御仏や泥鰯田螺を眠らせて

返り花墓誌に余白の二行ほど

木守柿つひに墓参の人を見ず

二の酉や「たけくらべ」など思ふのみ

大根を引く桂郎の声とんで
もらひ手の決まり榎櫃のおちつかず
月上げて十一月の村八分
力石二つ並びて小春かな
佗助咲く茶杓を削る音の中
声移り地面を擦つて冬の鴉
警策の音一つして漱石忌



竹間集

同人作品



マルと円

中村 洋子

小鳥来る現代アートのマルと円
飛火野に次々と立つ鹿の耳
甲 冑 は 赤 糸 絨 烏 瓜
新蕎麦を打つ手の見える奈良格子
掛 稲 や 水 生 植 物 園 の 中
廃校はいま美術館くわりんの実
黒の僧白の神父や小鳥来る

茶 畑

橋添やよひ

茶畑に深入りしたる神の留守
ありのまま牛きて茶の花日和かな
新藁の匂ひ雀がこぼしたり
在まつり京大の空大揺れに
芋茎神輿鎮西八郎立たせたり
鳥渡る墓碑銘は森林太郎
中京に本籍を置き鳥渡る

根の国ゆ

南うみを

根の国ゆ松江で二句噴き出す曼珠沙華なるぞ
あかときの霧の底ひの蜷掘る
橋に身を折るや反らすや鯨の秋
初鳴をすこしく散らし浮御堂
すつぽんが来る溝蕎麦を踏みしだき
生焼は焼けの瓜がごろりと畑終ひ
秋風を追はず送らずあそぶなり

猪 突 島谷 征良

秋の夜や加賀の地酒の封切らん
野菊咲き野に明るさとさびしさと
刈られたる秋草の上に青蛙
問へば昔々と答ふ草泊
一遍の遊行おもへば秋の風
海岸にまで猪の出しといふ
貝割菜露の力を得たりけり

日 月 大竹 淑子

鬼岳の爽籟天へ広がりぬ
月の雨時に音して降りにけり
月輪は雲出でにけり草の絮
山水の音を潜めて秋の天
色鳥や憤怒のほとけ在す寺
常磐木の香る天あり在祭
神燈に日月の文字小鳥来る

十三夜 宮川みね子

雁来紅耳朶ゆたかなる鉦仏
赤まんま御仏の笑みこぼれぬて
雁や生垣の日が移りゆく
秋薔薇沖を過ぎゆく豪華船
子規庵の二夕間の掃かれ赤まんま
新藁や極染色に雲暮るる
文箱の漆の匂ふ十三夜

御ふところや 浜 福恵

仏訪ふ旅の道なり鳥渡る
宝物殿の重き扉や鴈のこゑ
梵鐘一打浮葉の枯れのはじまりぬ
仏明を戴きふゆのはなわらび
田の沼に百の鴨ゐて夜の黙
薬師如来の御ふところや浮寝鳥
一声低く群を統べゆく鴨の在り

花山野 一秋一

一 浜 福惠 一

野牡丹にお薄一服もてなさる
曼珠沙華同じ帽子の山ガール
暮れ残るパンパスグラス溶岩の丘
妻となる曙草をブーケにして
コスモス園子どももの丈に咲き揃ふ
紅白の問答現の証扱かな
鬼灯鳴らす子ども名手の居た頃よ
田の神を山へ迎へて蔓人参
花野半里十七文字を蝶にして
茶の花に含差の雨上りけり

山河集

同人作品



神蔵器選

小春日や菊坂町に夏子なく

杉本薬士子

新装東京駅

秋風や東京バナナと新ドーム
玄冬やまだ若き眼のホームレス
石路の花百歳からを老後てふ
ペランダは冬の支度の妻の庭

秋灯火繕ふ初版の広辞苑

山本町子

松の実枸杞の実干して益軒養生訓
秋思かな畳に積んで未読の書
木の股に老匠一服松手入
一握の零余子門辺に届きをり

天高し侍稚児の草鞋がけ
鶉の来て頭を祓ふ幣の音

南奉 栄蓮

秋天より八百万の神降り立ちぬ
谷川は秋の水音旅籠かな
天婦羅の銀杏豆腐小鳥来る

浅田光代

あり余るさざなみに鴨来りけり
ひとつこと思ひて二人衣被
笛の音の一子相伝里祭
わが息の登りつめたる秋の山
綿虫や父に慟哭の日のありぬ

柿沼盟子

日のいろの濃こまかきところ秋の蝶
組まれゆく稲架の向かうに曼珠沙華
点と点つなぐとんぼの飛翔かな
身に入むや坂の途中にバスを待た
工房の薄き座布団十三夜

風土賞作品

青嵐

天野みゆき

一村は生絹の中や朧月
六無齋言ひける人よ春遅々と
陽炎や五体投地といふ禱り
合格子不意に逆立ちして歩む
河童忌や彼の世より吐く泥一つ
不用意の笑みを恥ぢけり夏祓
文人は鎌倉が好き傘雨の忌
手で捕ふ蛸一匹頼政忌



白面の神官なりし夜の桜
山なべてたてがみのあり青嵐
これ以上墓は傾げず大西日
灸花動かずをれと今日の易
つぶやきも書けば句となる花茨
煩惱は黒髪ゆゑに多佳子の忌
詩心の熟れ来たりしや蚯蚓鳴く
白秋や飛簷の反りに力あり
蓮の実や欣求浄土の邃し
今日生きる不思議蓑虫鳴く不思議
枯れてより語る林となりしかな
大寒や六波羅蜜寺の砂利を踏む

◇特別作品◇(抄)

秋 果

中根美保

無花果の夜露のうちに熟しゆく
ほどけやすくて新米の塩むすび
落雁に懐紙の余白秋うらら
干柿やどの実も底の膨れつつ
干柿に皮めくものの出来てきし
柿簾奥の間に灯の点りけり
鯛の皮の薄きを賞でにけり
秋冷や紅茶に添ふる砂時計
烏骨鶏の煮凝といふ琥珀色
梨畑枯れて森めく匂ひかな

風土独語／神蔵器



鱧とんではがね光りの遠江

林 いづみ

今年の「風土」の鍛錬会は、焼津グラウンドホテルを会場に、牧之原お茶の里庭園、茶祖像公園、川会所、番屋、蓬萊橋、焼津漁港と街並みを吟行場所と指定されて行われた。

掲出句は私が当日秀逸に選んだ句である。句の内容も姿もいいが、私がつとも注目したのは下五の「遠江」であった。この「遠江」のはがね光りの海にとぶ鱧の沖に、はてしない大きな太平洋が見えるからである。

遠江は勿論旧国名、静岡県西部に相当し、大略大井川を境に東に駿河、西に三河などに接し、戦国末期には今川氏が最も勢力をふるい、のち家康の所領となり、浜松は徳川幕府が確立するまでの拠点として日本歴史に華々しく登場する地名である。ただ海のこと少し気になった。それで、手元の「大百科事典」など見たところ、(廃藩置県で現在の静岡県の西部にあたる地域は、東は駿河、南は太平洋、西は三河、北は信濃、ふるくは遠淡海と書く)と出ている。なお藤枝の間島さんに聞いてみたところ、御前崎を中心とした遠州灘の海の方まで遠江と言っているとのことであった。

くりかえすようだが、「遠江」によって太平洋の大きさ、広さ、天日は晴れながら、茫洋とした沖からのゆるやかな波のうねり、それはもう夏のものでもなく、かといってまだ全く冬のものでもない。水面ははがね光りのかげやきをみせながら、大きく深い海の重さ暗さがある。もし駿河湾や日本海であったらこの太平洋の大きな感動はないのではないか。

明眸を向けられてみしマスクかな

天野みゆき

明眸は美しく澄んだひとみで、これだけで充分美人の形容だが、もつぱら明眸と同時に、歯ならびの白くきれいな美しさを加えて、一つの熟語「明眸皓齒」として美人をたたえている。

作者みゆきさんは、先頃、交通事故で一ヶ月ほど入院された。この句の「明眸」が気になるところだが、みゆきさんが入院された病棟の看護師さんではなからうか。(二〇〇二年三月、改法された看護婦の名称は消え男女とも看護師になった。男女同権が改正の理由とか、私にはなじめない)

「おはようございます、いかがですか」

毎朝、一番先に看護婦さんが検温に見える。マスクの上の二つのきれいな瞳がきらきらとかがやき、ほほえみがこぼれる。美人にはマスクもニューフェイスション。(以下略)

風土集



神蔵器選

鯉とんではがね光りの遠江 東京

林いづみ

師と頷つ木橋の揺れも雁の頃

突堤の端にて秋とすれ違ふ

茶の咲いて四五歩の先に桂郎忌

秋深き琴柱の型の花頭窓

枯野とて滅多に踏まじ仏在す 柑橋原

天野みゆき

明眸を向けられておしマスクかな

櫛比せる岳の隙より霧の湧く

生きざまは三面六臂枯野人

賤衣なる鬼の子泣くや泣かずとも

秋夕焼明日が見ゆるところまで 福井

池田光子

鯉跳んで焼津本町八雲橋

茶の花の蕾のないしよないしよかな

菊人形同じく香り敵味方

たぐり寄す夕日の芯の烏瓜

色鳥や社殿に震災募金箱 三鷹

布施まさ子

奥まつて瑠璃光如来金木屋

小鳥來る武蔵野画廊に「夢二」展

蒔き終へて土をたたけば蚯蚓鳴く

きのふより今日の色なる柿を挽ぐ

茶の花のかそけき風を聴いてをり 高槻

浅田光代

栄西禪師大王松は色変へず

大井川秋の夕陽を丸のみに

秋天に一本釣の竿百本

大いなるもののさみしき凍鮪

遠山に雲立ち秋を惜しみけり 大分

工藤はるみ

鳥渡る日田の名水汲みをれば

初紅葉窯元土の匂ひして

ひとところ背丈程ある裨を引く

秋惜しむ日の当たりたる父の句碑